創業者宣言

「ありがとう」を、贈れる社会をつくりたい。



コトギフト
KOTO GIFT
してあげたい、がつながる。

kanshas.jp
smile to smile

※「コトギフト」商標登録出願中

01

すべてのはじまりは、両親への贈り物を考えたあの日から。



父の日、母の日、誕生日、敬老の日。
大切な人に何かを贈ろうとするとき、
「何を贈ったら、本当に喜んでもらえるのだろう。」
と悩んだことはないでしょうか。

私も、ずっとそうでした。

約20年前。
高齢になっていく両親への贈り物を考えるたびに、
私は毎年のように悩んでいました。

洋服を選んでも、サイズや好みがあります。
時間をかけて選んで贈っても、結局あまり着てもらえず、
タンスの肥やしになってしまうこともありました。

そして両親から返ってくるのは、
「ありがとう。」という言葉とともに、
「もう、お金なんて使わなくていいのに。」
「何もいらないよ。」という言葉でした。



原点にあった「肩たたき券」と「お手伝い券」

この構想を考える中で思い出したのが、
子どもの頃、父の日や母の日に作った
「肩たたき券」と「お手伝い券」でした。

お金では買えない、小さな贈り物です。
でも、そこには
「ありがとう。」
「何かしてあげたい。」
という気持ちが込められていました。

考えてみれば、子どもの頃の私は、
モノではなく「自分にできること」を
贈っていたのです。

私は何度も考えました。
本当に喜んでもらえる贈り物とは、何だろう。

02

モノを贈るのではなく、「その人が困っていることを手伝う」という行動そのものを、贈り物にできないだろうか。



そう考えるようになったのが、
「コトギフト」という構想を考え始めたきっかけでした。

自分が掃除のプロである必要はありません。
庭の手入れができなくてもいい。
遠く離れて暮らしていてもいい。
自分に代わって、その「お手伝い」を届けてくれる人がいればいい。

してあげたい気持ちを、行動に変えて。

「してあげたい」を、「ありがとう」につなぐ仕組み。

贈る人には、「してあげたい」という想いがある。
受け取る人には、「してもらえて助かった」という喜びがある。
そして、その間で実際に「コト」を届ける人がいる。
私は、その人たちを「サービス・プレゼンター」と呼んできました。

単なる加盟店ではありません。
贈る人の想いを受け取り、サービスという行動に変え、受け取る人へ届ける人です。
その先に、「ありがとう」が生まれる。
それが、私が思い描いた「コトギフト」です。



贈る人

「してあげたい」
という想い

想いを贈る



サービス・プレゼンター

想いを受け取り
サービスという行動に変える

コトを届ける



受け取る人

「してもらえて助かった」
という喜び

ありがとう

03

今まで普通にできていたことも、高齢になると危険になる。



私の両親はとてもきれい好きで、
家の中をこまめに掃除することを日課にしていました。

ある時、父が椅子に乗って天袋の片づけをしていた際、
椅子から転落し、肩の骨を折る大けがをしました。

救急車で搬送され、入院して手術を受け、
その後も数か月にわたり通院とリハビリを続けました。

この事故を経験して、私は改めて強く感じました。

**「今まで普通にできていたことでも、
高齢になると危険になる。」**



高い場所の掃除



重い物の移動



庭の手入れ



ちょっとした外出

若い頃なら何でもなかったことが、
年齢を重ねるにつれて負担になり、時には大きな事故やけがにつながります。

それでも本人は、
「まだ自分でできる。」「人に頼むほどではない。」
と思ってしまうことも少なくありません。



ずっと元気でいてほしい。
だから、無理をさせたくない。

04

90歳で、父が自ら決めた「運転卒業」。



私の父は、とても安全運転に自信を持ち、
長年、無事故無違反で運転し、表彰も受けてきました。

それでも、高齢ドライバーによる事故を
他人事にはできないと考え、
「事故を起こしてからでは遅い。」
と、自ら90歳を節目に運転免許を返納しました。

返納の日、私は車の廃車から警察での手続きまで
一緒に付き添いました。





帰り道、
「もう、車には乗れないんだな。」
と寂しそうに話す父の姿が、
今でも印象に残っています。

帰宅後、私は事前に用意しておいた
「運転卒業証書」を父に手渡しました。
父は涙を浮かべながら、
とても喜んでくれました。

少し不便になっても、
ずっと元気でいてほしい。

免許返納後は、
「不便だなあ。」
とよく口にします。
だから今は、買い物や病院への送迎など、
車が必要な時には、できるだけ私が付き添うようにしています。

この経験から、私は改めて強く感じました。

**「今まで普通にできていたことでも、
高齢になると危険になる。」**



05

一度は挑戦した。
そして、もう一度。



今から約20年前、
私は「困っていることを手伝う贈り物」という
コトギフトの構想を思い描き、事業化に向けて動きました。

資料を作り、仲間と語り、営業にも挑戦しましたが、
当時は社会にまだ馴染まず、スタートすることはできませんでした。

それでも、この想いはずっと心の中に残り続けていました。
いつか、必ず実現したい。
そう思いながら、私は株式会社 kanshas.jp を設立し、
映像やドローン、Web、AI などの事業に取り組んできました。
現場で多くの人と出会い、社会の変化を見てきた今、
再びコトギフトに挑戦する時が来たと感じています。

これまでの歩み



2006年〜

コトギフトの
構想を考え始める



2012年〜2013年

事業化に向けて活動
（各種コンテスト・営業など）



2013年〜

kanshas.jp を設立
映像・ドローン・Web・AIの事業へ



そして、今

コトギフトを
もう一度、実現するために

あの時、叶えられなかった想いを、
今こそ形に。

社会やテクノロジーが大きく変化した今だからこそ、
コトギフトは実現できると確信しています。

これまでの経験と出会い、そして両親との実体験が、
今の私を動かしています。

あの時の想いを、
これからの未来へ。



06

大切な人の「今、困っていること」を、離れていても支えたい。



高齢になると、今まで当たり前にできていたことが、
少しずつ難しくなっていきます。
離れて暮らしていると、すぐに駆けつけることもできません。
だからこそ、大切な人の「今、困っていること」を、
信頼できる人の力で支えられる仕組みが必要だと考えました。

離れていても、
「ありがとう」を
届けられる。

こんな「困りごと」があります



高い場所の作業

電球の交換・天袋の片付け
など



庭の手入れ

草刈り・庭木の剪定・
外回りの掃除 など



買い物・外出

買い物の付き添い・
病院への送迎 など



重い物の移動

家具の移動・片付け・
粗大ごみの対応 など

「見守り」や「ちょっとした手助け」も大切です



見守り・話し相手

安否確認・外出の付き添い・
定期的な訪問 など



遠くからの支援

離れて暮らしていても、
コトギフトで依頼ができ ます。



家族の安心

無理をさせず、
安心して暮らせる毎日を。

モノではなく、「今、必要な手助け」を贈る。

大切な人の
「今、必要なこと」を、
贈れる社会へ。

大切な人が困っていることを、信頼できる地域のサービス・プレゼンター（SP）
が代わりにお手伝いする。
それが、コトギフトの原点です。
離れていても、今すぐそばにいなくても、
「ありがとう」を届けられる社会を目指しています。

07

「助けてほしい」と「手伝いたい」をつなぐ。



人と人がつながると、「ありがとう」が生まれる。

世の中には、助けを必要としている人と、
自分にできることなら誰かの役に立ちたい人が
たくさんいます。
この二人が、まだ出会えていないだけかもしれません。
コトギフトは、その出会いをつくり、
安心してつながるための仕組みです。

コトギフトがつなぐ3つの想い

助けてほしい人
（利用する人）



- 高い場所の掃除が大変になってきた…
- 庭の手入れをしてほしい…
- 買い物や病院への送迎があれば…

コトギフト

想いをつなぎ、「ありがとう」を生み出す仕組み

手伝いたい人
（サービス・プレゼンター／SP）



- 掃除や片付けの経験を活かしたい
- 地元で人の役に立ちたい
- 自分の得意なことで社会に貢献したい

つながることで生まれる「ありがとう」



利用する人の喜び

困りごとが解決し、
安心して暮らせる。



サービス・プレゼンターのやりがい

自分の経験や技術で
人の役に立てる。



贈る人の安心

離れていても、
大切な人を支えられる。



地域の活性化

地域で助け合う文化が
広がり、誰もが暮らしやすい
まちになる。

小さな「助け合い」が、大きな「ありがとう」を生み出す。

助け合いが広がると、もっと優しい社会になる。

家族や友人だけでなく、地域の中で「助けてほしい」と「手伝いたい」が
つながり合うことで、たくさんの「ありがとう」が生まれます。
それが、コトギフトが目指す社会の姿です。



08

「ありがとう」を続けるために、事業にする。



どんなに良い仕組みでも、善意だけでは
長く続けることは難しいと、これまでの経験から
強く感じています。
コトギフトは、一時的なボランティアではなく、
サービスを提供する人、利用する人、運営する人、
みんなが笑顔になれる、持続可能な事業として育てていきます。

支え合いが続くから、
「ありがとう」が
ずっと広がっていく。

コトギフトが目指す、持続可能な仕組み

利用する人
（贈る人・受け取る人）



困りごとが解決し、
気持ちが伝わり、
笑顔と「ありがとう」が
生まれます。

サービスを提供する人
（サービス・プレゼンター）



自分の経験や技術を
活かして、人の役に立ち、
適正な対価を得て
働き続けられます。

地域の事業者



地域の中で新しい仕事や
出会いが生まれ、
地域の活性化にも
つながります。

運営する人
（コトギフト）



適正な収益を確保し、
仕組みの運営・改善・
地域や全国への展開を
継続していきます。

善意だけでは続けられない現実



- ☑ サービスを提供する人にも
  生活があります。
- ☑ 地域の事業者にも経営があります。
- ☑ 安全に仕組みを運営し、改善し、
  広げていくためには、
  人材と資金が必要です。



だからこそ、事業として育てる。

- ☑ 利用する人が喜ぶ
- ☑ サービスを提供する人には
  適正な対価が支払われる
- ☑ 地域に新しい仕事や出会いが生まれる
- ☑ 運営側にも収益が生まれ、
  仕組みを継続していける

「ありがとう」を、一時的な善意で終わらせない。

人と人との支え合いを、無理なく続けていくために。
コトギフトは、持続可能な事業として、
「ありがとう」が循環し続ける社会を目指します。

続ける仕組みが
あるから、
もっと多くの「ありがとう」に
つながる。

09

約20年前の挑戦と、実現できなかった理由。



たくさんの応援を
いただきましたが、
あと一歩、
届きませんでした。

コトギフトは、最近思いついたアイデアではありません。
約20年前から構想を始め、事業計画を作り、
パンフレットやWebサイトを試作し、紹介動画も制作しました。
多くの方に構想を説明し、共感の声もいただきましたが、
実際に事業を動かすところまでは進めませんでした。

当時取り組んだこと

事業計画の作成



サービスの仕組みや
収益モデルを検討し
事業計画を作成。

広報ツールの制作



パンフレット・チラシ
Webサイトを試作し
紹介動画も制作。

多くの方への説明



商工会・商工会議所関係者
NPO関係者、知人など
100人以上に説明。

ビジネスコンテストに応募



ビジネスコンテストに
2年連続で応募。
しかし、2回とも二次審査で
落選となりました。

多くの共感の声をいただきました



とても良いサービスですね。

スタートしたら、
ぜひ利用したいです。

社会的意義があり、
共感できます。

サービスそのものには共感いただけでも、
「ぜひ一緒にやりましょう。」と
実際に事業を動かす仲間を集める
ところまでは進めませんでした。

実現できなかった主な理由

1 実現方法の提示不足

「誰が、どのように
サービスを届けるのか」
が十分に示せません
でした。

2 品質・安全性の仕組み

「サービスの品質や
安全性を、どう守るのか」
という仕組みが
不十分でした。

3 全国展開・継続性

「全国へ広げながら、
どう継続できる事業に
するのか」まで
説明しきれませんでした。

4 資金力の不足

全国の利用者と地域の事業者
をつなぎ、安全に運営するには
多くの資金が必要でしたが、
当時の私には資金力が
ありませんでした。

当時は環境も整っておらず、
今のようなつながりの仕組みが
ありませんでした。

また、当時は現在ほど、SNSやオンライン決済、
動画による情報発信、生成AIなどを活用して
人とサービスをつなげられる環境も整っていませんでした。
時代のタイミングも含めて、あのときは実現できなかったのです。

10

それでも、この夢を実現するために会社をつくりました。



もっと多くの「ありがとう」を生み出したい。

たくさんの方に共感していただきながらも、
実際に事業を動かすところまで進めなかった。
それでも私は、この夢をあきらめることができませんでした。
そして2012年、この想いを形にするために、
株式会社 kanshas.jp を設立しました。

「kanshas.jp」に込めた想い

kanshas.jp
smile to smile

株式会社 kanshas.jp

「kanshas」は「感謝」に「s」を加えた造語です。
一つの「感謝」だけでなく、
たくさんの「感謝」を生み出したい。
利用する人、サービスを提供する人、地域、
そして社会全体に、
「ありがとう」が広がる仕組みをつくりたい。
そんな想いを、社名に込めました。



この約20年間で積み重ねてきた経験

コトギフトの実現に向けて、私はこれまで様々な分野で経験と技術を積み重ねてきました。
これらの経験を活かし、コトギフトの仕組みづくりに挑戦しています。

01 ドローン空撮



空からの視点で、地域の魅力や人の暮らしを伝える。
13年以上の実績で、空撮技術と安全運航ノウハウを蓄積。

02 映像制作



企業・自治体・地域イベントなど、多様な映像制作に対応。
企画から撮影・編集まで一貫して制作。

03 Web制作・運営



コーポレートサイトや地域サイトの企画・制作・運営。
情報発信とサービス展開の基盤づくりを支援。

04 AI利活用コンサル



業務の効率化や新しいサービス創出に向けたAIの活用を支援。
これからの社会に必要な技術として取り組んでいます。

これまでの経験をつなぎ、「コトでありがとう」を届けられる社会をつくりたい。

ドローン、映像、Web、AI。
これらの経験は、それぞれ別々の仕事でではなく、
コトギフトという夢を実現するための、大切なピースです。
人と人をつなぎ、想いをカタチにし、
「ありがとう」を広げていく。
その土台を、この20年で少しずつ築いてきました。

これまでの経験が、未来の「ありがとう」につながっていく。



11

約20年を経て、もう一度挑戦します。



今度こそ、「ありがとう」が広がる社会をつくりたい。

あの頃は、今ほど人と人をつなげられる環境が整っていませんでした。
しかし今は、SNSやオンライン決済、動画による情報発信、
そして生成AIなど、コトギフトを実現するための技術や仕組みが
大きく進化しています。
この20年間で積み重ねてきた経験と、今の時代の力を活かして、
今度こそコトギフトを形にします。

今だからこそ、実現できる理由

つながり仕組みの進化



インターネットやSNSで、
全国の人と地域のサービス
をつなげられる環境が
整いました。

安心・便利なサービス基盤



オンライン決済や
予約・管理システムにより、
安心して利用できる
仕組みを構築できます。

動画・ドローン・映像の力



ドローン空撮や映像制作で、
サービスの魅力や想いを
分かりやすく伝え、
共感の輪を広げられます。

AIによる効率化と発展



生成AIなどの新しい技術で、
サービスの運営や情報提供を
効率化し、より多くの人に
届けることができます。

私が集めたいのは、お金だけではありません。

このプロジェクトで集めたいのは、資金だけではなく、一緒にコトギフトをつくっていく仲間です。
それぞれの立場からの参加が、コトギフトを大きく育てていく力になります。

利用したい人
（贈る人・受け取る人）



大切な人にコトを贈り、
暮らしの困りごとを
解決したい方。

サービス・プレゼンター
（地域の事業者）



掃除・片付け・庭仕事など、
自分の得意なことで
人の役に立ちたい方。

地域でつなぐ人
（地域サポーター）



地域で人と人をつなぎ、
コトギフトを広めて
くださる方。

経験や技術を提供してくれる人



IT・デザイン・広報など、
それぞれの専門性で
力を貸してくださる方。

共感してくれる人



「こんな社会になったらいいね」と共感し、
応援してくださる方。

一人ではできなかった夢を、みんなと一緒に実現したい。

20年前は、仲間も資金も足りず、実現できませんでした。
でも今は、同じ想いを持つ仲間と出会い、共に力を合わせることで、
コトギフトを実現できる時代です。

たくさんの人の想いが集まって、コトギフトはもっと大きく育っていく。

12

「ありがとう」が循環する社会へ。



コトギフトの原点は、
子どもの頃に贈った「肩たたき券」や「お手伝い券」の
ような、モノではなく「自分にできることを贈る」
という小さな贈り物でした。
あのときの素直な気持ちを、今の社会で、
もっとたくさんの人の間でつなげていきたい。
それが、コトギフトの目指す未来です。

「してあげたい」が広がっていく



家族
身近な大切な人に
「コト」を贈る。



親族
離れて暮らす
家族を支える。



友人
大切な人の
困りごとを手伝う。



地域
地域の事業者が
サービスとして届ける。



まだ会ったことのない誰かへ
全国へ広がり、
社会全体で支え合う。

「コトギフト」を、サービスから文化へ。

誕生日、父の日、母の日、敬老の日。
「今年は何を贈ろう？」と考えるときに、
「コトギフトにしようか。」
そう言えるのが、当たり前になる社会をつくりたい。
家族だけでなく、地域や社会の中でも、
「してあげたい」と「助かった」が自然につながり、
「ありがとう」があふれる。
コトギフトが、そんな新しい贈り物の文化として広がっていく。
それが、私の夢です。







コトギフト
ありがとうが
つながっていく

「ありがとう」を、もっと贈れる社会へ。

「してあげたい」と「助かった」が、自然につながる社会へ。
ここからは、私一人の挑戦ではありません。
皆さんと一緒につくる挑戦にしたいと思っています。
どうか、この最初の一歩に力を貸してください。



「ありがとう」が
あふれる社会を、
一緒につくりましょう。

代表取締役社長
押切 敦